



# 体感するアフリカ : 人類学者のフィールドノートから

梅屋, 潔

---

**(Citation)**

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 57:55-84

**(Issue Date)**

2022-02

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81013080>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013080>



# 体感するアフリカ

## —人類学者のフィールドノートから—

梅 屋 潔

### I

本稿では、いわゆる国際社会の実態が、ニュースを読んだり聞いたりしている情報からだけではどうもわかりにくい、ということを出発点に考えてみたいと思います。

どうしてでしょうか。なぜニュースは、私たちに、世界——この場合にはアフリカ——の全体像を伝えてはくれないのでしょうか。そして、私たち人類学者はどうやって、その欠を補うようなかたちで、対象となる社会や文化を理解しようとするのでしょうか。

いくつかの答え方があるのですが、ここでは、①人間も、社会も、文化も多面的であるのに、ニュースや情報は一面的になる傾向があること（これは裏返すと、全体像など分かりっこないという不可知論も導くことがあるでしょう）、②情報は重要性によって取捨選択するものですが、その取捨選択の性格、そしてその帰結として③アフリカなどが後回しになって、そしてまた偏見に満ちたバイアスがかかっているために理解が不十分になっている実態、④とりわけ細部が犠牲になっているということ、⑤選択の際の価値観にかなり問題があること、こういう順番でお話したいと思います。

まず、第一の問題から。根本的な問題として、人間は、ニュース、あるいは情報としてのみ存在しているわけではありません。私も、読者の皆さんも、報道で扱われることがあったとしてもそこで取り上げられる情報はわずかな一側面でしかありません。実際には人間というのは、立体的なもので、多様な顔や背景、歴史を持っているものです。例えば、私個人のことで言えば、最近全国のサイズの大きい読者や視聴者をもつメディアに取り上げられたのは、『朝日新

聞』『アエラ』『AbemaTV』などでしたが、そこでは、私が焦点化されたのは「呪いの専門家」としての側面でした。それ以外の、静岡県出身とか大阪市在住とかいう別の側面——アフリカ研究者である側面すら——言及されませんでした。ニュースには、このようにある一部しか取り上げない側面がどうしてもあります。これは、大きくとると、近代的合目的論の賜物とも言えます。その際のニュースでは、日本では「不能犯」として通常逮捕の対象にならないのがふつうであるのに「呪いの藁人形」で逮捕者が出た、という現象についての説明を求めているのだから、私の「呪いの専門家」以外の情報は、不要といって悪ければ、直接関係ない、として、捨象されるわけです。

その欠陥を乗り越えようとして、私の専攻する人類学では、フィールドワークの方法論を確立してきました。極端な話、合目的的に問いと答えとセットでできる情報交換は、いかにたつてできるわけです。現在はネットの時代です。地球の裏側に住む友人とのシンプルなコミュニケーションなら、SNSで十分可能です（このことだけ取り上げて、インターネットが進歩したから、わざわざ海外に行かなくても何でもできると信じる短絡をあちこちで見るのは困ったものです）。しかし、人間存在はそんなに単純ではない。

だから、ポーランド出身で主にイギリスで活躍した人類学者、マリノフスキは、現地の住み込み調査を重視し、フィールドワークにもとづく「民族誌」を書くプロセスを重視しました。ポイントはいくつもありますが、ここでは、教科書的なところからお話ししておきましょう。

## II

「民族誌」(ethnography) はもともと、ギリシャ語の *ethnos* (ポリス都市国家外部に住む人々) と *graphein* (書く) の合成語で、「(自分たちとは異なる) 人々について書かれた書物」という意味です。

自分が所属していない集団の仕組みや文化への関心は、人類が社会や文化を持ちはじめたところからのものだろうと思います。「民族誌」は、長い歴史を持っているジャンルなのです。「民族誌の父」とも呼ばれるヘロドトスの『歴史』や、

シーザーの『ガリア戦記』などには、非常に注意深い異民族の生活や慣習への観察とその結果としての緻密な記述をみることができます<sup>1</sup>。日本についても、文字で書かれた最古の記述である『魏志倭人伝』が、その文化に属さない「他者」によって書かれたものであることは、重要です。

『魏志倭人伝』の著者は西晋の陳寿とされていますが、日本の高校までの教科書などでは、卑弥呼が女王であって、占いで国事を決めていた、という部分のみ紹介されますけれども、実際には、服装、髪型、結婚形態から犯罪者の処遇、飼っている家畜や武器まで、民族誌と呼ぶにふさわしい記述です<sup>2</sup>。ほかにもマルコ・ポーロやイブン・バットゥータの紀行文なども、いずれも「民族誌」の先祖とっていいでしょう。

今日では、厳密な意味での「民族誌」は、「ある社会における文化的に有意な行動の記録と記述」であるとされていますが、そのような意味での近代的な民族誌とそのもとになる専門的フィールドワークは、1922年にマリノフスキ(Bronislaw Kasper Malinowski 1884-1942)が『西太平洋の遠洋航海者』<sup>3</sup>の出版が一つのターニングポイントになっています。

当時、『ノーツ・アンド・クエリーズ』<sup>4</sup>というマニュアルが改訂を重ねており、マリノフスキもそれを携えていました。しかし、彼の方法にはそれまでの研究者と決定的な違いがあったわけです。

グラナダ映像人類学研究所の社会人類学の映像教材『海外に出た異人』は<sup>5</sup>、これを「ベランダの外へ」という比喩で表現しています。すでに一世代前に、インテンシブ・リサーチとして、人口規模400～500人程度の村に一年ないしそれ以上住みつき、対面状況下で現地語を用いて生活文化の詳細を研究すること、という考え方は、ありました。ビクトリア時代に支配的だった、理論を構築する「アームチェア」の専門家と調査者の分業体制も解体されつつありました。しかし、実態は、従来のフィールドワーカーは、自らは快適な(今でいうコロニアル風の)宿泊施設に宿泊し、そのベランダにインフォーマント(情報提供者)を呼び、多くは通訳を介したままであらかじめ準備された、形式的質問をして回答を録音・記録する作業をしていたのです(実は残念なことこの手の調査

はいまだにあちこちで幅をきかせているようです)。

「ペランダの外へ」出たマリノフスキは、現地人たちの村にテントを張り、その中に住みこみました。そして現地語を学び、数年かけて獲得したその卓越した現地語の運用能力をもって、生活のなかに参与し、そこで観察したことを資料として蓄積したのです。マリノフスキは自分が実践したことを、その後の専門的人類学者に要求されるスタンダードとして教え込みました。彼が提唱し、その教え子たちに伝授したポイントは以下の4点に集約されます。

- (1) 現地における長期の参与観察法によってデータを収集する。季節の移り変わりなども考えて2年間以上を標準とすること。またこの期間は、「ラポール」(rapport) 構築のためにも必要である。フィールドの人々の生活に入り込む。その初期にはいわゆるホームシックやカルチャー・ショックも含め、彼我の「あたりまえ」がコンフリクトを起こすことが多い。多くはつらい経験を克服したうえで、自らの属していた文化とは異なったコンテクストを見出すことができる。ひとたび関係ができた社会を継続的に訪問し、追調査を行うことで理解を深めることができる。このことにより、最初に見聞した出来事が、毎年のルーティンなのか、その年だけのイレギュラーなのかも見極めることができるわけです。
- (2) 通訳を頼りにすることなくインタビューなどを遂行し、情報を得ることができるような現地語を習得すること。現地語で生活し、質問する。言語によって認識がある程度規定されるならば、研究の出発点としても鍵概念としても現地語の概念を重視することを意味する。
- (3) 現地の人々との信頼関係、ラポールを確立すること、そして調査目的をよく理解してくれる情報提供者、インフォーマント (informant) がいることが、調査成功のカギである<sup>6</sup>。
- (4) 現地社会の構成員として受け入れられること。「調査する側」「調査される側」という非対称的な関係ではなく、調査という関係を離れてインフォーマントと研究者が交流することが理想である。現地の人々の養

子、年齢組や世代組(あれば)の一員、義理の父親・母親、義理の息子・娘など、現地の社会の構成員のひとりとして権利義務関係に位置を得ることも重要である。そのためにも、「ベランダの外」で、彼らの住む村で暮らすことにマリノフスキは徹底してこだわったのです。

また、マリノフスキは調査の段階を三つに分けています。第一に、文化の骨格をなす諸制度、諸規範を明らかにする「具体的な証拠による統計的資料作成」。第二に、骨格に肉をつけ、血を通わせるための「実生活の不可量部分」(大切だが、はかることのできない実質)を得ることによって制度や規範の動き方(機能)を解明する段階。第三には、「血肉のかよった人間」に魂を吹き込む、つまり、制度や規範に対する住民の意味づけ、価値観を調査する段階です。

これらの調査でマリノフスキは、アンケート調査や形式的資料、あるいは構造的な質問に対する回答からは得ることができない資料を蓄積し、「民族誌を風習の諸項目の博物館的研究から行動の体系としての社会学的研究に変えた」として高く評価されています。このことは、単に民族誌的理解というものを事実の集積から、体系だった行動の集積として厚みのある記述と分析に変容させたということです。一面では断片的な知識ではなく、生活のなかの別のドメインの知識と結びついて動く「文化」や「社会」のイメージといったらいいでしょうか。

以降最も簡便な民族誌の水準にかかわる判定は、上記の基準が満たされているかどうか、で問われることが多くなりました。いわく「調査期間が短すぎる」「現地語の運用能力が怪しい」「現地に滞在していないのではないか」「現地人に仲間として認識されていないのでは」「現地人の立場になることができていない」などが、「民族誌」の品質保証を問う際に行われることもしばしばなのです。このようなマリノフスキ式の調査は、それまでであった質問項目や質問紙の調査を駆逐して人類学のなかで主流となっております<sup>7</sup>。

私はこの流儀のフィールドワークを、ウガンダの村を中心に、延べで3年間以上行ってきました。標題にある「体感」というのは、まずそのような意味です。

### III

根本的な問題として、日本のメディアが報道するアフリカのニュースは、量的に少なすぎる、ということがあります。最近ではケーブルやBSでBBCやCNNを見ることができるとお宅もあると思います（多くはダイジェスト版のようですが）。試しに、見ていただければ、かなりの分量がアフリカの情報に割かれています。もっといいのはヨーロッパでもどこでもいいのですが海外でニュースをご覧になることです。ここでもアフリカの情報があふれています。もちろん、この背景には、それらの国——イギリスやフランス——が、かつてアフリカ大陸に植民地を持っており、現在の言葉の正しい意味においてポストコロニアルな状況において——しばしば、この用語を、独立して植民主義じゃなくなったからハッピー、という脳みそお花畑的な意味で用いる方もいるようだが、普通は、独立しても形態を変えて政治・経済的に構造支配がなされている、と解するのがふつうです——アフリカが重要だ、ということを反映してもいるのですが。

もう一つ、「アフリカもの」は、ひと工夫しないと、「視聴率」につながらないのかもしれませんが。のちに言う理由で多くの人の関心を集めている、というわけでもありませんから。例えば、「ありえへん」ことがある地域としてカリカチュアライズする、「こんなところに日本人」のようなかたちで、「こんなところ」の代表にしてしまう。人類学者の吉岡政徳教授が、執拗にバラエティのやらせや、「未開」イメージの付与を批判しています。

「どんな良心的な番組であっても、「番組制作」というフィルターが常にかかっているため、悪意でなくても、「やらせ」や「捏造」が入り込んでしまうという。こうしたマスメディア民族誌で、……文明からかけ離れた秘境、未開として描かれることが多いからである。そして、バラエティ番組では、「やらせ」や「捏造」がエスカレートする」といいます<sup>8</sup>。

だから、たまにアフリカの情報がニュースになることがあっても、情報がゆがんでいることがしばしばあります。そもそも日本は国、アフリカは大陸で、比較するものの性格が違ってきます。歪んだ情報でイメージすると経験がない場合のアフリカ・イメージは、どんどん歪んでいくことになります。今でも「人

食い人種」や「裸族」のイメージでしか、アフリカを考えられない方も少数にはなりましたが、いないわけではありません。

私がアフリカに渡航することを決めたころにも、「どうして、アフリカなんて遅れたところに行かなければならないのか」という人もいました。しかし、経済的な規模は確かに小さかったかもしれないけれど、そのことと文化の問題とは無縁です。こういう経済のサイズで、文化や文明や「民度」をはかるようなことが、かつては行われていたようです。しかしこれもよく見ると、矛盾だらけ、偏見だらけであることがすぐわかります。例えばギリシャという国家は2010年と2015年に経済的にはほぼ破綻しましたが、「ギリシャから学ぶものはない」という言葉は聞いたことがありません。「いやいやギリシャには文明があったから」とおっしゃるかもしれませんが、人類発祥の地、アフリカにも数々の古代文明があったのです。かつて、14世紀から15世紀ごろヨーロッパや北アフリカからアフリカを訪れた人々は例外なくアフリカ文明を称賛していました。アフリカを蔑視する態度は、見出すことができません。グレート・ジンバブエなどは、その高度な技術から、アフリカ人の祖先のつくったものとは信じられず、ソロモン王のゆかりのものが作った、とかユダヤ人が作った、とか、古代フェニキア人が作った、などという説が多数創作されたほどです。

15世紀、ポルトガル王は、コンゴの王と対等の兄弟王としての関係を築いたとされていますが、その後起こった奴隷貿易や植民地主義を可能にした西洋中心主義は、現在でも日本を覆いつくしているようです。

ヘーゲルは、アフリカ人が人間を超える力——神——を措定せず、自由な自己——人格の概念を持たない段階にとどまっており、世界史の範囲からはずしましたし（ヘーゲル 1994：160-169）、人類学者の先祖に数えられることもあるゴビノー（Gobineau 1853-1855）は、『人間不平等論』のなかで、「黒色人種は最低であり、人種序列の下に立っている…受胎した時から動物的な特徴がニグロに刻印され、その運命を予言している。その知能はつねに極めて狭い枠のなかから出ることはないであろう」と書いています。啓蒙思想家の、モンテスキューは、「きわめて英明なる存在である神が、こんなにも真つ黒な肉体の

内に魂を、それも善良なる魂を宿らせたという考えに同調することはできない。人間の本質は色であるという考えは非常に自然で……」<sup>9</sup>と考える人がいることを、奴隷制批判の文脈で述べています。

つまり、ヨーロッパの進歩と、発展のコインの裏表として、奴隷貿易の三角貿易が成立し、その理論的な正当化としてアフリカ人蔑視と、アフリカを人間に含めようとしない疑似科学が成立したのです。もちろん、奴隷貿易の全盛期には、「人権」概念がすでにヨーロッパに成立していましたから、その裏で奴隷貿易をしているのが具合がわるいので、「人間ではない」ことにしようとしたのでした。

残念ながらアフリカと対等のまなざしでつきあっていたそれ以前のポルトガルとコンゴの兄弟王などの記述は日本の世界史教育からはそっくり抜け落ちてしまっています。

もちろん、このことに気付いている人はたくさんいるはずです。例えば、近代を代表する思想家である和辻哲郎は「アフリカの文化」という随筆のなかで、オーストリアの民族学者フロベニウスの著作『アフリカ文化史』によりつつ、「野蛮なニグロ」像はヨーロッパのつくりごとであり、ヨーロッパの影響前のアフリカには、素晴らしい文明世界があり、深い教養が貴賤を問わず人民に共有されていたことに感嘆しています<sup>10</sup>。

#### IV

そのほかにも、ニュースなどを聞いていて、アフリカで生活をしていた者の立場から気になる言葉が時々あります。

「民族紛争」という言葉がありますね。私たちはああいう報道に納得することは少ないのです。うっかりすると、人々は民族が違うという理由で殺しあっているかのようなイメージを与えてしまう。一見そう見えるだろうルワンダ・ブルンジの虐殺問題も、ツチとフツという民族集団のラベルが、ベルギー統治時代にIDに書き込まれたことで決定的に固定化したカテゴリーであることが知られています。それ以前は、わりと普通にツチがフツに、フツがツチに看板を

変えることがあったことが知られています。

しかも、ハビヤリマナ大統領の暗殺をはじめとする高度に政治的な問題や、「千の丘ラジオ」などマスメディアを利用した煽動の結果が不幸な虐殺につながったわけですが、そのことを「民族紛争」という言葉は隠蔽してしまいます。政治紛争なのに民族紛争というラベルをつけることで、本当は国家レベルの権力闘争が、村レベル、ローカルレベルの争いのように思ってしまう。

また、南スーダンの問題は、ヌエルとディンカという二つの民族集団が基軸になっていることは事実です。しかし、それは「民族」が違うから起こっている「紛争」というのではなくて、二つの集団の歴史的経緯が絡み合っていることなのです。とくに彼ら牧畜民の「牛略奪」という長い歴史を紐解いてみる必要が本当はあるのです。

牧畜民は、神話上、すべての牛は自分たちのもの、と考えていたといわれています。私の調査の初期に出会った牧畜民出身の大学生が——彼のベッドルームには壁に4本、ベッドの下に4本の槍が常に置いてあるのだそうですが——、私に日本のことを尋ねたことがありました。ウガンダでは、日本車が9割を超えるので、日本というのは、「ファクトリー」なのだ、と思っているようでした。森林が国土面積の70パーセントを占めるのだ、という「ライヤー（嘘つき）。まったく信じてもらえません。教科書にそう書いてあるということで、「小さな国だと聞いた」といいます。ウガンダは本州とほぼ同じ大きさなので、ウガンダよりは広い、といえますと「ライヤー」。

ちょうどそこに、カラスが飛んできました。「あんな鳥はいるか」「いる」「では、鶏はいるか」「いる」「山羊はいるのか」「地域は限定されるけど、いるね」だんだん不機嫌になってくる。最後に「牛はいるのか」と彼が訪ねた時、「いる」と私が答えるや否や、ぎらりと彼の目が光りました。「それは全部われわれのものだから、返してもらおうか」。

牧畜民は長い間、グループごとに「牛略奪」をお互いにしあっていました。「どうしてBグループの牛を略奪するのだ」とAを詰問しても、なかなか難しい。部外者である私たちを納得させるのは難しい論理だとしてもそれなりの論理は

あるのです。例えば、「いやこの牛は確かにBに先ほどまでいたものだが、実はAが昔略奪されたものだ」とか「略奪された牛の子だ」という答えが返ってくることもあります。場合によっては、「略奪のさなかに殺された弟の血をこの牛で償う賠償金だ」という回答が返ってくることもあります。長く続いていると、ゼロポイントを設定するのが困難です。

このことは、相続問題にもあらわれてきます。私の調べている民族では、ある人が死ぬと、借金もすべて相続されることになっています<sup>11</sup>。仮に父親が死んだ場合、父親が払いきれなかった、婚資が例えば子供に相続されます。牧畜系の民族の多くでは、婚資は牛何頭などと家畜の数で数えられます。子供はそれから母方親族からの取り立てに対応することになるのです。私の調べている民族では結納は、牛5頭ですが、地域によってはこの相場が違って、25頭、というところもあります。嫁の父に渡す（約束をする）のが一般的ですが、その兄弟にも、いろいろな婚資の支払い義務が発生すること多い。それが大変な額になるグループもいます。参考までに牛はウガンダでは円でいうとだいたい30,000円ぐらいで買えますが、1998年には、一人当たりGDPが332ドルでしたので、普通の人の年取ぐらいなわけですよ。日本は今4万9千ドルくらいなので、約500万円とすると、日本人の実感としては、婚資に2,500万円くらいかかるということになります。とても支払いきれずに次世代に繰り越されるわけです。多くの場合、支払いきれずに当人はなくなることになります。その間事実婚で子供はでき、孫もできる。こうした貸し借りの関係が、何世代にも渡って続いているわけです。しかもその関係は必ずしもネガティブなものではない。私たちが借金をネガティブにとらえるのは、借りなかった時点があるからです。しかし生まれつきながしかの借りがある社会では、むしろ借りにネガティブな色付けをすることも難しい。全員がながしかに借りているわけですから。

私は、3年ほどの間に村では、正式な結婚式には2度ほどしか招待されたことがありません。2週間に一度の葬式と比べるとかなりレアです。いずれも新郎新婦は60をとうに過ぎていました。

と、いうわけですので、子供でも生まれつき借金がある、という場合があり、多くの場合あちこちに借りがあるわけで、うっかり日本の企業などで働いて給料が出ますと、いろいろな親戚が次から次へ取り立てが来ることになります。

よく開発関係者や、日本の商社の方が、アフリカ人は給料を上げてもすぐに使ってしまう、とこぼすのを聞いたことがあります。背後にはこうした事情があります。決して個人が金遣いが荒いわけではなく(稀にそういうケースもあるようですが)、仕方のない部分もあるのです。

## V

もうひとつ私たちが、ニュースなどを見てアフリカが「わからない」理由は、距離的な問題も大きいといわなければなりません。実際に足を運ぶのに地理的なハードルがあるわけです。加えて、私たちの日常生活に目を転じて、アフリカの人も(増えては来ているものの)、身近にはそんなに暮らしていない。このことと理解が進まないこととの間には、強烈な相関があるでしょうが、それは日本国政府の外国人受け入れに関するポリシーの問題も関係するので、難しいところもあります。技能実習生制度など、多少制度も改善されましたが、なかなか深刻な問題が残っています。ただ、最近では、楽天のオコエ瑠偉(父親がナイジェリア人)バスケットボールの八村塁(父親がベナン人)、陸上のサニブラウン・アブデル・ハキーム(父親がガーナ人)、や姫路育ちの漫画家・タレント、星野ルネさん(母親がカメルーン人)などの活躍が目立ってきましたので、数十年間でまた変わってくると思うのですが。

こまったことに、身の回りにいませんと、自分の生活にかかわりあいのない全くの「他者」として、関心の外に置いてしまったり、少なくとも関心の重心がおかれない、ということはあるうらと思えます。私もこういう研究をしていなければ、そうなった可能性はあると思えますし、私がアフリカ研究を始めたころの私の身の周りの人々も、そうでした。

しかも新聞の構成みたいなものが、人間の関心や情報集め、分類、価値づけの基準になることがあります。特に高度経済成長を支えた世界観はそういうも

のだっただろうし、今も少なからずそうだと思うのです。新聞だと「経済面」「政治面」が偉そうにしていますよね。新聞社を舞台にした漫画や文学ではたいてい、「文化面」担当者の文化部が「政治」担当の政治部の記者に馬鹿にされる場面が描かれます。

今なおそうだな、というのは、例えば政府の旗を振っている「グローバル人材」というやつです。あれはどう考えても英語を使って、海外でビジネスをバリバリやる、というイメージですよ。間違ってもアフリカや東南アジアや南米の村落や森林に住んで、農耕や牧畜や狩猟採集の生活様式を学んだり、サイズの小さい言葉を学んだり喋ったりする、というイメージではない。百歩譲って、そういった地域に行くことを想定している場合には、「遅れた」地域の開発のために行く、というような古典的な援助のイメージが付きまどっていることが少なくない。間違ってもアフリカや東南アジアや南米から「学ぼう」という視線は生まれてこない。人類学は、こういった地域から学んでいこうとしているわけなので、相性がわるいわけです。残念なことに、こうした事業で人類学者が重視することに価値がおかれることは、めったにありません。

ひとつ、こういった関心から外れがちなこととして酒の飲み方とお葬式を取り上げようかと思えます。

フィールドノートのメモからの一節です。

……友人と一緒に、私はホテルのカウンターでビールを頼んだ。「グラスも？」とバーテンダーが訊く。彼は冷蔵庫からビールを出し、目の前で栓を抜いた。あまり冷えていない。コースターに乗せたグラスの横にビールを置く。隣ではぬるいビールをストローで飲んでいる客がいる。ちょっと私が席をはずした際にバーテンはさりげなくコースターをグラスの上に載せた。友人は、「いい店だ、白人に親切だ」という。いったいこの奇妙な配慮にどのような意味があるのか、しばらく考えなければわからなかった。……

私たちは日本では一般に瓶のビールをグラスに注いで飲んでいきます。ウガン

ダの場末のバーでは、グラスは置いていないのが普通です（ホテルだからここにはあった）。グラスがない場合には、ストローで飲むカップ飲みです。

伝統的にはマルワ（ウガンダでもっとも話者の多いガンダ語で地酒の総称）を植物の繊維で作ったストローで壺から飲んでいたので大してグラスには執着がないようです。また冷たいビールへの日本人が持つほどの執着もないようです。ぬるいビールのほうが「健康にいい」という考えもあるようです。瓶は、必ず客の目の前で開けることになっています。新しいビールで、詰め替えたものではないことを示すと同時に、毒を盛っていないことへの証明となっているという人もいます（ストローも客に選ばせるが、それも同じ理由だという）。コースターを上に乗せてくれたのは、「蠅よけ」と、誰かが毒を盛るために接近することを防いでいるのだといいます。

そして友人がいうのには、それをバーテンがしてくれたのは、彼の日本から来た「ムズング（白人）」に対するホスピタリティの表現だということです<sup>12</sup>。

どうでもいいことの集まりです。しかし、文化というのは厄介で、どうでもいいことが集まると、無視できない社会規範や、マナーなどあだやおろそかにできないようなことにつながってくるわけです。

続いてお葬式のお話をしましょう。

私の体験では、こんなことがありました。私がフィールドワークをはじめた1997年ごろは、ウガンダ各地はHIVの蔓延に苦しめられていた時期でした。滞在していた村にも頻繁に死者が出て埋葬が行われました。もちろん医師もない村では死因の医学的な確定などは行われません。

患者がやせ細ってゆくところから「スリム」とも呼ばれるHIVが主な死因であることは、ほぼ公然たる事実とされていました。私の印象ではほぼ毎週半径10キロメートルほどの範囲内で埋葬が行われていたような印象です。

埋葬がおこなわれることは夜更けに打ち鳴らされる太鼓の音や、伝言などで知らされます、正装した人びとが道行くのをみるとだいたい葬式関係とみて間違いない。

この村の人びとの習慣では、人が死ぬと屋敷のはずれの土地に埋葬するので

す。埋葬の際には親族たちは遺体を包む白い布や棺などをその関係の距離に応じて持ち寄ることになっています。近しい親族のほか、同じクランの人びと、近所の人びとが正装して集まり、楽団が呼ばれ、「フンボ」(ロング・ドラム)、「トンゴリ」(弦楽器の一種)、「テケ」(木製打楽器)などを打ち鳴らしながら「アジョレ」と呼ばれる挽歌が歌われます。

「わが隣人がブッシュで獣に食われている、父よ、死はこのようにやってきたのだ、母よ、死はこのようにやってきたのだ……」「……穀物倉は空になり、シコクビエは枯れ果てた……」などという歌詞の歌声の響く間、女性たちは「ヒー、ヒー」という死の際にあげる叫び声をあげ、小屋の前で踊りを踊ります。

死者の持ち物、特に鍬や杖を振り上げて威嚇めいたそぶりを見せるものや、屋敷の端まで頭に両手をやって死者の名を呼び、泣き叫びながら走り出すものもいます。

こうしたさなか、あちこちから到着した参列者はまず遺体を「見る」ことを期待されます。それは葬儀に参列した人びとの「あたりまえ」の義務です。ここではカメラを掲げていたりすると、さらに積極的に写真を撮るのをすすめられたりします。そしてその写真を遺族にプレゼントすることが期待され、彼らはそれを見て例外なく喜んでいました。

この態度は、帰国後にそれらの遺体の写真を見た日本人たちの態度とは対照的でした。もちろん、彼ら遺族にしても生前の写真があればそれにこしたことはなかったのかもしれませんが、ここには写真週刊誌に遺体の写真掲載の自粛を迫る日本の「良識」とはずいぶん違う態度がありました。数年前に、「葬式なう」とSNSに投稿して、炎上した例を思い出すと、ずいぶん違う態度です。

しばらくの間は、遺体に蠅がたからないように扇いでいる遺族の前で、口が開いてしまわないように布で顎から頭にかけて布で縛られている遺体に向けてシャッターを押すのは気が引けるものでしたし、落ち着かない感覚は現在でも残っています。

しかし、カメラを構えると泣いていた遺族が微笑んで一時的に体を脇によけて、遺体を私が写しやすいようにしてくれるのにもある程度慣れてしまいました

た。私のアルバムにはいまや十数体の遺体の顔がおさまっています<sup>13</sup>。

最近では、死因のほとんどは、エイズであるといわれます。ウガンダは、その感染率をひた隠しにする東アフリカ諸国のなかでは例外的にエイズ患者の推計数を早くから公開し、その撲滅につとめてきました。都市のエリートに関してはそれなりに成功をおさめているようです。しかし、村落の撲滅についてはお手上げ、というのが正直なところ です。

エイズ予防の知識を普及しようとするある若者と話していて、気付いたことがあります。

長老が政治的、象徴的な権威をもつこの地域で、長老の前でセックスの話をするのはタブーです。したがって長老にエイズ予防にコンドームを使え、などとは、若輩者は口が裂けてもいえません。長老も自分の性についてあからさまに語ったりもしません。それは、マナーのうえでは忌避されているのです。かりに長老自身がコンドームを使おうと思ったところで一体誰がコンドームを入手すればいいのでしょうか。長老たるものは自分で買い物をしたりはしません。たいがい親族の子供にさせるのですが、子供に「コンドーム」を買って来い、などとは長老は口が裂けても言えないのです。また気を利かせたつもりで若者が買ってきて渡したりしたら、これもまたこの上もない失礼に当たるのです。これは不敬による「呪詛」の対象にすらなりえます<sup>14</sup>。

このような解決不能な価値観や社会規範の絡み合いも、フィールドワークの副産物でこそ気づくことです。

## VI

さて、どうでもいい、細かなミクロな文化実践の話ばかりしてきたように思われるかもしれません。しかし、カメルーン出身の人類学者、フランシス・B・ニヤムンジョさんが強調するように、人間社会の、インターコネクテッドネス (interconnectedness, 相互につながりがあること) というのは重要で、だからこそ、私たちは遠いアフリカのことまで理解しようとするわけです<sup>15</sup>。「文化面」の話ばかりしていると、説得力がないかもしれませんので、ここではあえて「経

「経済面」と「政治面」の話をしていきましょう。

2021年1月の調査によると、日本国内でスマートフォン、ケータイの所有者のうちスマートフォン比率が92.8%となりました。年々、日本国内におけるスマートフォン比率は増加しており、2010年には4%程度だったスマートフォンの所有比率ですが、2015年に5割を突破し、2019年に8割を超えました。そして2021年にはスマートフォンの比率は9割を超えているそうです（モバイル社会研究所調べ）。

私たちのスマホやノートPCあるいはタブレットのコンデンサーには、タンタルというレアメタルが用いられています。鉱石としての名称は、コルタン（Columbite-Tantalite）。精製したものをタンタルといいます。一説によれば、全世界のタンタルの総埋蔵量の80パーセントがコンゴ民主共和国にあるというのですから、そこから逆算すると、私たちの使っている端末のコンデンサーはもとをたどればコンゴ民主共和国にいきつくわけです。コンゴ民主共和国の川か露天掘りが多い鉱山からコンゴ人の掘り出したコルタンが、様々な人の手を經由して私たちの手元のスマホに装填されているわけです。リチウムイオン電池に欠かせないコバルトも世界産出量の53パーセントはコンゴ民主共和国産が占めているということです。

コンゴ東部が、「地質学上の奇跡」というべき豊富な地下資源の宝庫であることが見出されたのは1900年ごろのことです。以来、つねに「コンゴ動乱」「シャバ州紛争」などの紛争の種となってきました。銅、コバルト、スズ、タングステン、そしてタンタル。このように国土の地下資源は豊かなのに、いやだからこそ地域の治安は乱れ、「貧困」が再生産される、こういう構造を「資源の呪い」といいます。

コンゴ産のタンタルの売り上げは、長引く「コンゴ内戦」の両陣営の軍事資金となっているわけです。国土の地下資源が豊かであればあるほど、それは無尽蔵の軍事資金に転換されてしまいます。平和は遠のいていく、そういうアイロニーがあります。

反政府軍側の鉱物はルワンダ、ウガンダ、ルワンダなど近隣国を通じて世界

市場に出回ります。政府側の鉱石の販売には、数多くのグローバル資本が関与しています。最近では中国の大規模な投資が目立っています。

2001年の国連安保理の専門委員会でこの「紛争鉱物」問題が告発されました。このタンタルの不正採掘による利益が武装勢力の資金源となっており、ウガンダ内戦、ブルンジ内戦、第一次コンゴ戦争（1996—1997）、第二次コンゴ戦争（1998—2003）を深刻化させ、長期化させた原因となっている、と報告書は指摘しています。

2010年7月、アメリカで金融規制法が改正された（Dodd-Frank Wall Street Reform and Consumer Protection Act of 2010、通称ドッド＝フランク法）。その15条1502項「紛争鉱物開示規則」により、アメリカの証券と関連をもつ企業はコンゴなどの紛争鉱物の使用の有無を米国証券取引委員会（SEC）へ報告する義務が課されるようになりました。

コンゴでは「オバマ法」として知られるこの法律は、人々から搾取し、ゲリラ戦の資金源となるルートを使った資源を使ってはならないとの考え方から制定されました。法律制定後、しばらくはコンゴ産のタンタルやコバルトといった「紛争鉱物」を忌避する動きが一般的でしたが、2011年、モトローラ、インテル、IRM、ノキア、HPなどがホープ・プロジェクト（The Solutions for Hope Project）をたちあげ、DRCからの「コンフリクト・フリー」（その規準が問題だが）なタンタルの取引がうたわれるようになっていきます。しかし何らかの絞り込みが行われたのならば、端末の価格に反映されそうなものだが、端末の価格は変わらないので、規制が効いているのかは疑わしいと思っています。最近では、この規制が単に「紛争」解決や軽減に貢献していないばかりか、この外来の解決策がコンゴ住民の生活環境をむしろ圧迫しているとの報告もあります<sup>16</sup>。

このあたりのことも、あまり新聞には載ってきません。実際には、載ることもあるのですが、なかなかフォローがされない。そういうように考えると、ニュースや情報のフローの性格が、知識が蓄積しない構造を維持しているともいえそうですね。

ニュース・バリューが低いと思っているのかもしれませんが。しかし、そうやって近視眼的に付き合いのある国のことばかり調べていると、とんでもない見落としがあります。例えば、ナミビアのウラン埋蔵量は世界埋蔵量の5パーセントとも8パーセントともいわれ、ウラン産出量が世界第三位、露天掘りのウラン鉱山としては世界最大規模のロッシング鉱山を擁していました。その豊富な資源を活かし、2018年までに原子力発電を実現するのがナミビア政府の計画でした。ロッシング鉱山を事実上所有するリオ・ティントなどの多国籍グローバル企業や、イランなど資本の影も見え隠れしていました。公には否定されているがナミビアから核開発を進めるイランへウランが極秘裏に流れている、との噂が立ったこともありました。

私は2019年にナミビアを訪れましたが、このロッシング鉱山は、リオ・ティントから売却され、2019年に中国ウラン省が買い取っていました。そしてほぼ同時に中国からの開発援助でナミビア大学には軍事研究学群が設立されていました。もともとナミビアは北朝鮮と非常に友好的な関係を維持してきましたので、このことは日本の安全保障上も大きな事件になってしかるべきなのですが、私はこの件について国内メディアが報じた例を知りません。

ついでに、もうひとつの「世界商品」のお話をいたしましょう。ウガンダ、ケニア、タンザニアにまたがるビクトリア湖でとれる大型淡水魚、ナイルパーチは、コンビニ弁当やイギリスのフィッシュ・アンド・チップスなどの材料になっています。ナイルパーチは、アルバート湖原産の大型肉食魚で、1960年代にビクトリア湖に放流されると、食物連鎖の頂点にたち、たちまち大繁殖しました。かつては400種を超えたビクトリア湖在来種のシクリッドの多くは絶滅の危機に瀕し、湖の生物の60%は死滅しました。藻を食べるシクリッドの減少で湖は富栄養化し、生態系も壊滅的打撃を受けました。

一方で儲かったのは、魚肉冷凍加工産業です。ヒレ肉だけをきれいに加工して冷凍し、EUや日本などグローバル・マーケットに輸出する産業が急速に伸びました。政府は、それまでの輸出品に代わる輸出の目玉として、産業を援助しましたし、国際社会は供給を安定させるためと、途上国の産業促進のためとあつ

て工場のインフラ整備にはヨーロッパからの多額のODAが注ぎ込まれていません。

湖畔の漁村には、近隣から数多くの人々が時には国境を越えてやってきます。ビジネスチャンスを求めてのことです。出稼ぎ漁民たちで漁村は賑わう。出稼ぎの漁民たちを目当てにマラヤ(売春婦たち)が集まり、HIVの蔓延で親を失い、魚を包装するスチロールを燃やして出てくる薬物でらりったストリート・チルドレンが街角にあふれる、という死のスパイラルができあがってしまっている。そういう構図が、映画『ダーウィンの悪夢』で描き出されました。

こう考えると、私たちがコンビニ弁当の白身魚のフライを食べることは、ウガンダ、ケニア、タンザニアの輸出に貢献していることとなります。間接的には、末端にいるビクトリア湖畔の漁師たちと、間接的ながら、遠い関係を結ぶこととなります。「無関係」といってはられないわけです<sup>17</sup>。

## VII

最近の若者は「内向き」だとマスコミには言われているようです。私にはこれが正しいのかどうかはわかりません。しかし、コンビニに代表されるように、一見なんでも手に入るような便利な社会が実現したことと無縁ではないように思っています。便利さとした「内向き」ぶりはコインの裏表のようにも思うわけです。

「アフリカとか関係ないから。行くつもりもないし、アフリカ人と友達になる予定もないし」そういう方が時折いることは確かです。なかには「私は、なぜ国際的な問題に関心を持てと言われるのか、わかりません」と文化人類学の授業の感想に書いてくる子もいます。

こういう「他者」への無関心は、無関心にとどまらず、「関係ない」と考えるようになってしまって、ある種の排除として働く可能性も否定できないところです。

そこでは、単位は国でも社会でも個人でも、何でもいいのですが、「自分だけで生きている」かのような錯覚が醸成されています。

しかし、ご存じのように、私たちは、人であれ、社会であれ、国であれ、それだけで独立した単位で存在する、ということはありません、不可能です。鎖国していた江戸時代でさえ、ポルトガルやオランダとの関係や、様々な世界史のインタレストのなかにあったわけです。

コンビニだって品物を開発する人、作る人、運搬する人が介在するサプライチェーンあってこそその存在なわけで、実際には、インターコネクテッドネスが何より重要です。これは随所で言えることだろうと思います。

スマホだって、コンゴ民主共和国の炭鉱で働く人がいなければ、成立していません。先ほどのいくつかの「世界商品」について考えてみるだけで、この「つながり」は容易に立体化させることができるでしょう。

このように、間接的にであれ、つながっている、時には意図や意識もなく相互につながってしまっているのがグローバル社会です。そこで、単に行ったことがないから、そこ出身の人に会ったことがないから、という理由で自分に関係がない、と思ったり言ったりするのは、実態に即していない認識であるということが、わかっていただけたのではないかと思います。

我が国のニュース・メディアももっと本当の意味でのコスモポリタンを目指してほしいものですが、なかなか見通しは暗いところがあります。ですから私どもなどは、長期的にこういった視野と関心をもった方が、メディアや開発で偉くなって構造を変えてくれるのを待っていて、そのためにも、地道に次世代にこういったステレオタイプを再生産しないように、日々努力しているところです。

アフリカの人口は1950年には2億2400万人で全世界の8.9%でしたが、2000年には8億1200万人に増加し、全世界の13.4%を占めるようになりました。アフリカでは人口増加率が依然高い水準で推移し、アフリカの人口は2050年には19億3700万人に達し、全世界の21.3%を占めることになると推測されています。昨今ではLeapfrog（蛙飛び）と呼ばれ、固定電話抜きでスマホ、銀行口座抜きでモバイルマネーが普及するなどイノベーションは飛躍的に普及しています。いつの試算かはわかりませんが、13億人ともいわれる巨大市場は、

経済的にも多くの発展を期待されています<sup>18</sup>。

「人新生」時代といわれます。人間が地球に地質学上の爪痕を与えるようになり、地球という限られた資源を、そこで生きる人類、動植物、生物とどう分かち合っていくのかが問われているようでもあります。

「進化論」的には、後から、生き残ることができた形質をさかのぼることができても、事前に将来の危機に関して打てる手や生き残り戦略は、予想ができません。何が幸いし、何が命取りになるかはわからないのですから。せいぜい「多様性」を担保することぐらいしかないでしょう。

このような状況で、他者との共存を支える重要なコンヴィヴィアリティ（共益、餐宴）やウブントウイズムの概念の重要性が、カメルーン出身の人類学者から提唱されるのも偶然ではないでしょう。

これまでのアフリカ発の思想は、「奴隷貿易」「植民地主義」といった負の歴史を反映して、西洋に対するカウンターカルチャー的なものになるものが多かったわけですが、ニャムンジョさんのそれは、西洋文明のよいところを残して、休眠状態にあったアフリカ文明の財産につないでいこうという野心に満ちているものです。

私は、彼の思想に、後期資本主義の行き詰まりを打破する可能性を見えています。

しかも、こういうことを考えるのは、彼だけではないようです。それは、端的に言えば、お金で買えない大切なものがある、という価値観の確認です。ユルゲン・ハーバーマスが、合理性の生活世界の越境から、人類の合理性の本当の可能性を救出しようとするポテンシャルを、宇沢弘文が、市場で売買してはならない社会共通資本、コモンズとして重視しようとしたものと同じ意味合いの「大切なもの」の存在です<sup>19</sup>。

ニャムンジョは、2019年5月22日、「アフリカの日」を記念してブルームフォンテンで「ウブントウイズム」にかんする講演をしています。最後にこの内容を紹介したいと思います。

「ウブントウ Ubuntu」とは、南部アフリカで広く用いられている言葉です。相互接続と相互依存を大切にするウブントウ精神においては、多くのものが少

数の手に握られていたり、相互の義務を軽んじたりするようなことはあつてはならない。ウブントゥが教えてくれることは、「人間の成長は、完全に他者との間で相互依存している」（ニヤムンジョ 2019：187）ということです。これは、生きていくうえでの相互の関係、相互の義務、互酬性を重視した考え方で、継続的にわかちあいを続けることで自分と他者との互酬的なバランスを維持しようとする、という意味でフランスの社会学者、マルセル・モースの提唱した「互酬性」と類似している、とニヤムンジョはいいます（ニヤムンジョ 2019：187-189）。

こうした価値観のもとでは、富は、互酬の義務を果たすことで流通し、与えたり受け取ったりというサイクルが維持されることによって自分も他人もお互いが利用できるものになるわけです（ニヤムンジョ 2019：188）。その際に贈与されるものは、貨幣のような匿名性の高いものよりは、もっとパーソナルなモノのほうがよい。パーソナルなものは、時とともに歴史性を帯びる力があるのです（ニヤムンジョ 2019：189）。

マリノフスキが調べたトロブリアンドの「クラ交易」では、下位の腕輪ムワリと、貝の首飾りソウラヴァが交換財として知られています。それらの財（バギと総称します）としての価値は、象徴的なもので、何かを買ったりするために用いられることはありません。いわゆるオール・パーパス・マネーのような財ではないのです。手に入れて持っていると尊敬の対象になります（その意味では権威の源泉にもなるのですが）。

クラ交易では、隣の海域のクラブパートナーが決まっています、もらう側が所有者のところに交渉しに訪問することになっています。首飾りは右手の島に行き、腕輪は左手の方角の島にもらいに行きます。このことでこの海域全体を俯瞰的に見ると、首飾りは時計周り、腕輪は反時計回りに、長い年月をかけて回転するように動いているのです。

面白いのはその交渉の際に、まだ手元にない、次に手にするはずの財にまでしばしば言及されることです。それぞれのバギは固有名を持ちます。例えば、「カサナイベウベウという有名な首飾りはまだ隣の島にあり、そこの自分のクラブパー

トナーが持っているのだが、時期が来たらもらえるはずだから、その代償として、今日の前にある腕輪をよこせ」というような具合です。クレジット決済などの信用経済に少し似ていますので、経済人類学的には、この事例は近代経済学の、信用経済とは、貨幣経済が一段と進んだ状態である、という定説に対する批判となりました<sup>20</sup>。

この財の象徴的権威の源になるものがそれらに漏れなくついている、持ち主の履歴です。あの島の、誰々という、高名なチーフが持っていた、このバギ、という具合に、パーソナライズされているわけです。その偉大な歴史上のチーフの履歴に私は連なっているんだぞ、と。そうやって、なかには、2千年の時を超えて、連綿と受け渡され続けて、現在でも流通しているものがあるといわれています。

この財は貯めておくことができません。バギは、ある時期が来たら手放さないと、批判を浴びます。ひどい場合には毒殺の対象になることもあるようです。いわゆる「蓄財」することができないわけです<sup>21</sup>。

だからこの財の特徴は貯めておいて何かの目的に使うわけではなくて、その存在意義は、何かと交換するために「使う」ことにはありません。「交換」「コミュニケーション」「貸し借り」そういったものを続けていく、そこに究極的な意味があるのです。

再び、ニャムンジョさんの言葉に耳を傾けてみましょう。

……究極的には、人間として生きていくということは、貸したり借りたりの繰り返しです。人生はすべて貸し借りのめぐりあわせであるということ、永遠に返すことができない借りがあるということを認めることが大切です。同じ人間、自然環境、資源、あるいは先祖たちなどの超自然的な力などに、返せない負債があるのです……（ニャムンジョ 2019：189）。

ニャムンジョさんの説く、これらの互酬性は、人間と人間の関係に限られません。自然、資源、先祖など、幅広い範囲のエージェントとの取引として人間

関係や社会像が構想されているのです。

詳しくは別の機会に検討いたしますが、この哲学は、真言密教、華嚴経などの唱える「縁起」の発想など、東洋の様々な思想にも通底するものだというように思います。地球上の異なった場所の、おそらくは全くルーツを共有しない哲学が異口同音に同じことを唱えるということは、それが真理に近いからにちがいません。

何より、「いいこと」を言ってるのに、その発信源が「アフリカだから」無視するのは偏見にほかなりませんし、「いいこと」に耳を傾けないのは、何より勿体ないことです。同じ「人類」のということです。その人類の出自を云々することはひどく小さなことのようにも思えます。

右肩上がりの成長というメタファーに憑りつかれた<sup>22</sup>、この300年がむしろ異常だったのです。私たちはこの人類の発祥地と目されるアフリカの、カメルーン熱帯雨林由来の哲学を、かつて見下した人々のように、見下すことはできないのです。少なくともその根拠は、全くありません。

私たち近代人には、進歩の思想と理想が染みついています。15世紀よりは、16世紀がより進んだ、いい時代だ。それよりはもっと後のほうが、よりましたな社会であった、と考えようと思います。しかし、本当にそうでしょうか。きちんと考えてみないといけないと思います。見方によってトップとビリが逆転することは、しばしば起こります。人類学は結構これが得意です。極端かもしれませんが、世間的なランク上位の有名大学というものを、ある方が、「権力と利権を求める多数の白アリ学生を輩出している有害大学」と半ば本気で断じたことがあるほどです<sup>23</sup>。ご自分も有名大学を出て、有名大学の教員だったのですから、これもまた体験にもとづくものともいえるでしょう。

前近代、というのは、たいがいの場合、その後進性を指摘する悪口です。しかし、ことアフリカとの付き合い方に関する限り、私には、前近代の、たとえば15世紀のコンゴの王とポルトガルの王との兄弟王関係のほうが、復権すべき、良好な関係、目指すべき望ましい関係のように見えています。

## 謝辞

この論考は、2021年6月19日(土)に芦屋市市民センターで行われた「世界はニュースだけではわからない」と題するシリーズの講演と、11月4日(木)に宝塚市立南口会館で行われた「国際理解ゼミナール」の草稿をもとにしています。芦屋市、国際理解ゼミナール関係者に深く感謝します。また、この内容には以下の研究費が直接・間接的に関係しています。記して感謝します。笹川科学研究助成(13-054)、JSPS 科 研 費 22401040、23242055、24520912、15K03042、16H05664、16K04126、18H00789、19H04354、19H01400、令和元年～令和2年度二国間交流事業「自然災害的災害に対するレジリエンスの研究—日本とアフリカの民族誌から」および平成29～30年度JSPS二国間交流事業共同研究・南アフリカ(NRF)との共同研究「21世紀の南アフリカと日本におけるシティズンシップ」、平成28～令和2年度JSPS研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」、平成30年度神戸大学国際文化学研究所研究推進センタープロジェクト「シティズンシップ概念の地域的展開と理論的展開に関する共同研究」。令和2年度神戸大学国際文化学研究所研究推進センタープロジェクト「共生とコンヴィヴィアリティ——グローバル・シティズンシップの可能性と限界」。2021～2023年度国立歴史民俗博物館共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究——制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」。

## 註

- 1 ヘロドトス(1971-1972)、カエサル(1994)。
- 2 石原編(1985)。
- 3 マリノフスキ(2010)。
- 4 マリノフスキが所持していたのは、*Notes and Queries on Anthropology, Fourth Edition*, 1912, A Committee of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Irelandである。Sixth Edition(1951)をもって最後とし改訂されていない。
- 5 *Bronislaw Malinowski: Off the Verandah, Strangers Abroad*。
- 6 モーガンにとってのエリー・パーカー、ボアズにとってのジョージ・ハント、グリオー

ルにとってのオゴテメリやターナーにとってのムチョナなど、卓越した知識をもったインフォーマントとの遭遇によりその後の調査が一変するという現象はよく報告されている。

- 7 梅屋 (2017a : 28—32)。
- 8 吉岡 (2005)、<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/yoshioka/nariyuki.html> [2021年6月19日閲覧]
- 9 モンテスキュー『法の精神』(1989 : 58)。
- 10 和辻 (1995 : 88—92)。
- 11 梅屋 (2018)。葬式については、第二部 (417—515) に詳しく扱ったが、それでも借金の相続や未払いの婚資の相続については、分析内容との結びつきが弱く、詳しく書くことができなかった。
- 12 ここで紹介した酒の飲み方に関するエピソードは、梅屋 (2005 : 247—250) で紹介したことがある。
- 13 葬式で写真撮影が求められるというエピソードは随所 (梅屋 2005 : 251—255, 2011 : 62) で紹介したことがある。
- 14 梅屋 (2011 : 62)。
- 15 ニヤムンジョの思想については、日本語で読めるものとしてニヤムンジョ (2016, 2017, 2019) がある。梅屋 (2017b) も参照。
- 16 梅屋 (2017a : 266—270)。
- 17 梅屋 (2017a : 266)。
- 18 椿 (2021)、別府 (2021) など。
- 19 ネグリとハート (2003 : 386-389) は、コモنزを、マルチチュードの具体化であり、解放、とし、斎藤 (2020 : 140—147) もそれを受け入れて「宇沢のいう社会共通資本のようなもの」と紹介している。
- 20 さらに進んで、これらの財の交換が合目的な価値を持っていないことから、すべての取引の起源を物々交換にもとめる、近代経済学のドグマに対する批判となっており、モース流の「互酬」の重要性を喚起する事例としてよく用いられた。簡便な紹介は、中沢 (2010)。

- 21 マリノフスキ(2010:121-157)。  
22 ル=グウィン(2020:149-153)。  
23 長島(2014:148-150)。

## 参考文献

- 石原道博(編訳) 1985『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝——中国正史日本伝(1)』岩波書店。
- 梅屋潔 2005「グローバル化と他者」『文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』奥野克巳・花淵馨也(編)、235-258、学陽書房。
- 梅屋潔 2011「私と「地域」とのおつきあい」『地域構想学研究教育報告』第1号、63-70。
- 梅屋潔 2017a「グローバルイシューと周辺社会——人類学は、社会の「役に立つ」か?」『新版文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』(梅屋潔・シンジルト編)学陽書房、263-287頁。
- 梅屋潔 2017b「「見えない世界」と交渉する作法——アフリカのウィッチクラフトと、フランス・B・ニヤムンジョの思想」『思想』1120号(2017年8月号)、岩波書店、86-98頁。
- 梅屋潔 2018『福音を説くウィッチ——ウガンダ・パドラにおける「災因論」の民族誌』風響社。
- 梅屋潔 2020「フランス・ニヤムンジョ、ウィッチクラフトを語る(1)——エージェンシーを「飼いならす」宇宙論と公共性」『社会人類学年報』46号、1-30頁、弘文堂。
- カエサル 1994『ガリア戦記』國原吉之助(訳)講談社。
- 斎藤幸平 2020『人新生の「資本論」』集英社。
- 椿進 2021『超加速経済アフリカ——LEAPFROGで変わる未来のビジネス地図』東洋経済新報社。
- 中沢新一 2010「解説 クラと螺旋—新しい贈与経済のために」マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者 メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎訳、講談社。

- 長島信弘 2014 「反トレンド思考の勧め——ランキング低評価事象に目を向けよう」『結晶 (第八集) 世界と地域の未来を拓く大学をめざして』中部大学。
- ニヤムンジョ、フランシス、B. 2016 「フロンティアとしてのアフリカ、異種結節装置 (カレンシイ) としてのコンヴィヴィアリティ」楠和樹・松田素二訳、平野 (野元) 美佐・松田素二編『紛争をおさめる文化』京都大学学術出版会。
- ニヤムンジョ、フランシス、B. 2017 「開発というまぼろしが、ウィッチクラフトの噂を広げているのだ——カメルーンの事例を中心として」梅屋 潔訳、『思想』1120: 99—127。
- ニヤムンジョ、フランシス、B. 2019 「アフリカらしさとは何か——ウブントウという思想」『世界』924: 184—196。
- ネグリ、アントニオとマイケル・ハート 2003 『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳、以文社。
- ハーバーマス、J. 1985～1987『コミュニケーション的行為の理論(上・中・下)』河上倫逸、M. フーブリヒト、平井俊彦、藤沢賢一郎・岩倉正博・丸山高司、厚東洋輔他訳、未来社。
- ヘーゲル、F. 1994『歴史哲学講義 (上)』岩波書店。
- 別府正一郎 2021『アフリカ——人類の未来を握る大陸』集英社。
- ヘロドトス 1971～1972『歴史上・中・下』松平千秋訳、岩波書店。
- マリノフスキ、B. 2010『西太平洋の遠洋航海者 メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎訳、講談社。
- モンテスキュー 1989『法の精神』岩波書店。
- 吉岡政徳 2005 「バラエティ番組における未開の演出」飯田卓・原智章編『電子メディアを飼いならす』90—103 せりか書房。
- ル＝グウィン、アーシュラ 2020 「あるメタファーにしがみつくとこと」『暇なんかないわ——大切なことを考えるのに忙しくて』(谷垣暁美訳) 149—153、河出書房新社。
- 和辻哲郎 1995 「アフリカの文化」『和辻哲郎随筆集』88—92 頁、岩波文庫。
- A Committee of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, 1912, *Notes and Queries on Anthropology*, Fourth Edition, Routledge & Kegan Paul.

Goubineau, J. A. 1853-1855 *Essai sur l'inégalité des races humaines*.

#### 映像誌等

*Bronislaw Malinowski: Off the Verandah, Strangers Abroad*. Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.

『ダーウィンの悪夢』(Darwin's Nightmare) フーベルト・ザウパー監督・製作、オーストリア・ベルギー・フランス・カナダ・フィンランド・スウェーデン作品、ビターズ・エンド配給、2004年。

『クラ——西太平洋の遠洋航海者』(すばらしい世界旅行)、牛山純一（プロデューサー）、市岡康子（ディレクター）、製作、テレビ放映、1971年10月24日。

NHK 高校講座 世界史「アフリカのイスラーム化と諸王国の興隆」「ヨーロッパによる植民地支配」松田素二・吉村民、2005年。

#### 新聞等

『朝日新聞』2017年1月31日、朝刊33頁、東京本社（佐藤恵子「見せてはいけない——「わら人形」で脅迫容疑（ニュースQ3）」）。

『女性セブン』通巻2558号、2017年3月2日号、144—145頁、小学館、2017年2月16日（「アナタの知らない、ゾットとする世界「平成のわら人形」呪い、呪われて」）。

『女性セブン』通巻2566号、2017年5月25日号、54—55頁、小学館、2017年5月11日（「遺体ホテルが海外メディアから注目されている理由——遺体ホテル——さよならの時間、さよならの力」（新われらの時代にNo.697））。

『AERA アエラ』No.39、第30巻9号、通巻1638号、2017年9月11日発行9月4日発売（高橋有紀「人を呪わばやさしさ二つ——現代「わら人形」考」）。

AbemaTV「AbemaPrime」「成功率7割超！「呪い人形」を使った呪い代行業者を真剣直撃！」2018年11月16日。

『女性セブン』通巻2770号、2022年1月27日号、133—135頁、小学館、2022年1月5日（「この人いやだ…」と思ったら——自宅でもできる最新「縁切り」の作法」）。

## Experience of Africa : Based on the Fieldnotes of an Anthropologist

Kiyoshi UMEYA

This article is a record of a lecture for the general public. This lecture aims to consider Africa as a concrete example, starting from the problem awareness that the actual situation facing the so-called international community is difficult to understand when based only on the information that is read, heard or watched in the news. Furthermore, while explaining how anthropologists attempt to understand the society and culture of interest in a way that compensates for some of the shortcomings of news, the purpose is to depict some of the characteristics of Japanese society today.

Noted shortcomings of news include: (1) while human beings, society, and culture are multifaceted, news and information tend to be one-sided, (2) information is selected according to its importance, but the nature of the selection and its consequences are (3) Africa and other regions are placed on the backburner, understanding is inadequate due to prejudiced bias, (4) the details are especially sacrificed, and (5) there are considerable problems regarding values when making a selection.

In an attempt to overcome these shortcomings, fieldwork methodologies have been established in the field of anthropology. Bronislaw Kasper Malinowski (1884 – 1942), an anthropologist from Poland who was active mainly in the United Kingdom, emphasized local livelihood surveys and the process of writing “ethnographies” based on fieldwork. At the heart of this is actually living and experiencing the area.

In this lecture, I will introduce some cases of feeling a sense of discomfort and episodes that I have experienced through my research experiences, and at the same time, I will attempt to explain the anthropological recognition and a kind of awareness that possibly urges people to reflect on our understanding of things in daily life.

**Keywords** : Africa, experience, news, anthropological recognition, Japanese society  
キーワード : アフリカ、経験、ニュース、人類学的認識、日本社会